

平成 30・31 年期 神奈川県青少年問題協議会企画調整部会
「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」
～青少年のコミュニケーションと育ちを考える～中間とりまとめ（案）

1 審議テーマと検討経過

(1) 審議テーマ「情報ネットワーク社会における青少年育成・支援」

県では、「かながわ青少年育成・支援指針」のもと、青少年の健全育成や社会的自立の支援、青少年を育む環境づくりに取り組んできた。

これまで、青少年が遊びや地域活動への参加等を通じた多世代との交流や、体験活動、青少年が安心・安全に過ごすことができるよう地域の見守り・居場所づくりを推進してきた。

近年、情報化の進展により、青少年の間でも SNS などインターネット上でやりとりするコミュニケーションが増えている。また、小中学校の新学習指導要領では、情報活用能力を言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけ、情報通信技術を受け身ではなく、手段として積極的に活用していくことが求められている。

一方で、青少年の中には、リアルなコミュニケーションが上手くとれず、不登校やひきこもりになるという現状が引き続き生じている。また、インターネット上において青少年が事件・事故に巻き込まれることや、ネットいじめが起きている。

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会においては、青少年のコミュニケーションについて、現状を踏まえて捉え直し、青少年の育ちに必要な支援について調査審議を行うこととした。

(2) 協議内容

検討にあたっては、青少年行政における 3 つの視点から協議を行う。

○ 青少年のコミュニケーションのあり方

「顔と顔の見える関係」や「SNS などのネット上の関係」など様々なつながりがある中で、青少年のコミュニケーションのあり方を捉え直し、今後の青少年の健全育成について検討する。

○ 困難を有する青少年への支援

不登校やひきこもりなどの青少年におけるコミュニケーションの課題や、青少年への支援のあり方について検討する。

○ 情報ネットワーク社会への対応

情報ネットワーク社会における青少年の健全育成や青少年への支援など、青少年の健全やかな成長を支える大人や社会のあり方について検討する。

(3) 協議経過

平成 30・31 年期神奈川県青少年問題協議会は、平成 30 年 9 月 10 日に審議を開始し、以降、平成 31 年 2 月までに企画調整部会において、4 回の議論を行ってきた。部会においては、協議内容の 3 つの視点から委員が意見発表を行い、それを基に意見交換を行ってきた。本資料は、こうして深めてきた議論の結果を中間的にまとめたものである。

	委員名	テーマ
第1回部会	藤井部会長	非定住の自己形成を支援する自由なコミュニケーションネットワークの構築
第2回部会	笹井会長	バーチャルなコミュニケーションの可能性
	坂倉副部会長	well-being な情報技術に向けて
	西野委員	困難を抱える青少年への支援を中心に
	梶田委員	困難を抱える青少年～支援現場より
第3回部会	青木委員	「ともに学び」「ともに育つ」つながる地域社会！
	坂本委員	若者のSNS利用 大学生の視点から特にLINEについて
	田中委員	ひとりひとりの、強み・らしさを見つけるきっかけとなる場や機会づくり
	牧野委員	孤立でもなく、つながりでもなく - または、アーキテクチャからモディファイド・アフォーダンスへ -

2 現状

(1) 青少年のコミュニケーションのあり方

ア 言語能力とコミュニケーション

- 学校教育では、子どもの言語能力について、表現する力だけではなく、論理的な思考力を含むものとして、自分自身の感情を適切に用いて言葉に表現するということを伸ばしていくことになっている。ただし、学校教育においては、教育目的に沿って言語能力を育てていくため、子どもの生活や過ごし方とずれるところもあり、学校教育だけでは、十分にコミュニケーションを育てていくことはできない。
- 子どもたちの言語の応用能力が落ち、読解力が下がっていると言われている。言語能力が下がっているということは、これまで言語で構成されてきた自我を作れなくなっているのではないか。
- 子どもたちが乳幼児期から辛い、悲しいといった感情を言葉で受けとめてもらえなくなっているのではないか。寂しかったね、痛かったねと親子関係の中でしっかりと受けとめられた体験が不足しているのではないか。言葉にして、自分の気持ちを語っていいと思えないのではないか。

イ 日常のコミュニケーションを支えるSNS

- SNSは、昔は自分の身の回りにはいない、自分にとって必要な人と出会うツールであったが、今は、すでに知っている人との関係を維持する道具になってきている。バーチャルなコミュニケーションはリアルと別にあるのではなく、人間関係全体を維持するためのインフラとなっている。LINEなどがあることを前提に、人間関係や組織、学校、地域を考えなくてはならないようになってきた。
- 若者は、LINEを当たり前に使っている。LINEは、知り合い同士がリアルタイムでやり取りできるなど、会話のような手軽さがある。
- 若者にとって、SNSの「いいね」や「リツイート」の数は、その人の価値のように見える指標になっているのではないか。
- パソコンやスマートフォンは、新聞やテレビなど従来のメディアが持つ主義主張や意見、メッセージを伝えるメッセージ伝達機能と、感覚や感性を伝える感覚刺激機能をあわせ持つ。また、従来のメディアの中では、情報の受信者であった人が、情報の発信者になることができるという特徴がある。情報ネットワーク社会では、「情報を解釈・理解する力」、「情報を編集・創出する力（情報を発信する力）」が求められるのではないか。
- SNSによるコミュニケーションコンテンツは、バーチャルの世界で楽しさや、面白さを自分なりに取り出し、作り、加工・編集できる。また、メッセージと感情、感性が一体化あるいはクロスオーバーしている。関連して、公共的なことと、プライベートの境目がなくなり、情報発信に関しては大きな問題を引き起こすことになっている。

ウ 子どもの自己形成

- 子どもの自己形成を考えた場合に、「今をすごく充実させていきたい」、「10年、20年先の長期的な自己イメージが持てない」、「自分自身のリスクとして一つに絞りにたくない」といった自己形成のあり方は、定住しない姿の模索である。

これまで、教育は子どもを支え、しっかりした世界の中で育て、社会に解き放そうという考え方だった。新しい課題は、定まった世界に支えられることなく成長し、どのように生きていくのか。何かの能力において未熟であったとしても、社会空間に関わり、生きる世界を構成する者として子どもを捉えていくことで、「非定住の自己形成¹」という課題に応えるようなネットの空間の構築ができないか。

- 個人のニーズややる気は、個人が持っているものではなく、元来、関係性の中から発生するものであり、また、関係の中で自分の存在を感じ取っていることを捉え直す必要があるのではないか。埼玉県調査では、非認知能力、いわゆる肯定感や承認関係の中において、頑張ろうと思う気持ちそのものが、学級経営との関わりでは学力向上につながる。単に子どもたちが知的なものを詰め込まれるだけでは、学力はあがらず、自分でやろうという気持ちが出てくると、学力とが相関関係があることがわかってきている。

エ 地域の状況

- 地域の自治会や子ども会などが衰退する中で、祭りなど日常の暮らしの中で、大人が生きいきとしている環境の中に子どもがいてこの町に暮らしてよかったと思える文化が途絶えてきているのではないか。
- 厚木市森の里地区では、「地域社会が地域の子どもを育てよう」、「地域ぐるみで、子どもの縁でつながる人のネットワークづくり」、「ともに学び、ともに育つ、成長するまちづくり」を活動の理念としている。子どもたちが実体験できる場の創出や、きっかけづくりを通して、多様な人との出会いから生まれるコミュニケーション、また、子ども同士の仲間づくり、大人同士の仲間づくり、人の繋がりが生まれている。

(2) 困難を有する青少年への支援

ア 生きづらさを抱える青少年

- 青少年の問題は、大きく格差が広がり、二極化したと感じる。子どもたちは、「貧困やネグレクトからくるストレス」と、「過干渉によるストレス」をためている。
- 「自己責任」により、失敗は許されず、100%でなければならないという思い込みから、失敗したら社会は助けてくれないので頼れる人を作っておかないと危ないという学生が多くいると感じている。
- 子どもの頃から「やりたいこと」をしなさいと言われて続けて育っているが、「やりた

¹ 「非定住の自己形成」：家庭、学校、地域という定まった場所での子どもの自己形成に対して、「SNSやインターネットの世界という定まらない場所（＝非定住）」で自己形成すること。（藤井部会長意見発表資料）

いこと」は、色々な体験がないと出てこないはずなのに、フリーハンドで言われ続け、「やりたいこと」がない自分は駄目な人間だと思ってしまい、自分で「やりたいこと」を決め、目標を立ててやっていかなくてはならないというプレッシャーがあるのではないか。

- 子どもたちは、「個性的であれ」と言われ続け、人と比べて個性的だと思うけれども、実はこの個性には序列があると思っている。しかし、この序列には基準がなく、自分が上に立とうとすれば、相手を潰すことが一番早いので頑張る上に行こうと思わないのではないか。ある意味では、下の方へ皆で引きずり降ろしあって平準化しようということが生じる、目立とうとしないということが生じるのではないか。
- 「認定 NPO 法人育て上げネット」による電話相談では本人とつながることは少ないが、LINE相談では短期間に多くの本人とつながることができた。LINE相談というバーチャルな対話の場では、相談者が途中でお風呂やトイレに行くということを何も言わずにする。相談が終了したのかと思うと、お風呂に入っていましたということがあった。こうしたことが、日常の友人との関わりでも生じていると考えられる。
- 子どものSOSは、なかなか言葉でキャッチできない。子どもは、なかなか助けてと言えず、親に心配かけまい、自分のプライドが邪魔をするなど相談機関を利用しないことが多い。「発見する相談」という、子どもたちのSOSをキャッチできる感度のいい大人たちを地域の中でしっかりと研修などして増やしていく必要がある。

イ 困難を有する青少年とコミュニケーション

- 「認定 NPO 法人育て上げネット」による「若年無業者白書」の分析では、困難を有する若者は、相談できる友人が少なく、大半の若者が家族に相談している状況がある。
また、同法人を利用する若者は自信がないことやコミュニケーションの苦手意識を改善したいという意識がある。さらに、職場で仕事上のわからないことを相談できない若者も多く、人との対面でのコミュニケーションの苦手さに悩んでいる。

ウ 安心して失敗できる場の不足

- 失敗する体験が不足している。親たちが失敗や怪我をさせまいとすることにより、子ども・若者は極度に失敗を恐れている。安心して失敗できる環境を地域の中で用意することや、できないということを受け入れていけることが大事である。
- 学校以外の育ちをどう位置付けるか。不登校は悪くない、問題行動ではないということ地域に広げていく必要がある。
- 高校生年齢以降のひきこもりへの支援が不足しているのではないか。ひきこもり・不登校支援として、地域の中に目的なしに集えるような場が必要である。

エ 青少年が社会に出る準備の難しさ

- 「VUCA」の時代²といわれるように、不確実性、複雑性が高い時代となり、正解

² 「VUCA」の時代：「Volatility（変動性、不安定さ）」、「Uncertainty（不確実性、不確定

がなく、前例や経験が通じにくい社会になり、青少年が社会に出る準備が難しくなっているのではないかと懸念されている。大学入学や就職内定により先が見えるということはなく、就職しても離職するなど成長するには時間がかかるという印象がある。

- ミレニアルズ世代³が育ってきた環境は、格差が広がる中でも、経済的な豊かさを背景としたサービスがあり、体罰や厳しい指導などが減り、個性が尊重される教育を受け、失敗する前に大人にサポートされるほか、試行錯誤したり自由な遊びの経験などが少ない。こうした中で、若者は、個性を尊重してくれる大人を信頼するが、個性を脅かされそうになると殻を閉じるという傾向があるのではないかと懸念されている。

(3) 情報ネットワーク社会への対応

ア SNS普及における弊害

- いつでもどこでもどんな情報にもアクセス、コンタクトできる便利な社会になったが、生身の人間の情報処理能力がオーバーフローして心身に負担がかかっているのではないかと懸念されている。こうした中で、子どもたちにSNS疲れやネットいじめといった問題も生じている。
- 若者の中では、LINEの返信を5分以内にするといったルールなどが何となく作られ、それに囚われて、息苦しくなる。フィルターバブル⁴や、自分が興味のあるネットワークの中だけで発言し、自分の発言が素晴らしいものだと勘違いするなど、技術そのものというより、予測していなかったリスクが発生している。

イ 情報技術の活用

- デジタルネイティブといわれる若者世代は、SNSやクラウドファンディングサイト、ブログなどあらゆるツールを使い、自分でプロジェクトを構想して実現しようと思ったことを形にすることに長けている。
- 四国のある町では、「メーカーズスペース」という3Dプリンターやレーザーカッターなどを使える場所で、地元の高校生が町からイベント商品の作成を請け負うという活動をしている。また、地元の方が小学生に3Dプリンターを使用してフリスビーを作って遊ぶという授業をしている。フリスビーは手軽で、体を使って遊ぶことができるし、パソコンを使ってフリスビーを自分で作るという体験ができる。

さ)」、「Complexity (複雑性)」、「Ambiguity (曖昧性・不明確さ)」がより顕在化してくる時代(平成30年3月経済産業省中小企業庁「我が国産業における人材力強化に向けた研究会(人材力研究会)」報告書引用)

³ ミレニアルズ世代：1980年前後～2000年前後生まれの世代を指す。(田中委員意見発表資料引用(@DIME「若者の心をつかめぬ企業に未来はない」))

⁴ フィルターバブル：検索エンジン(人工知能)はユーザの嗜好を学習し、ユーザが喜ぶ結果を優先的に表示する。そのため、各ユーザの見たくない情報を遮断する(フィルタ)ことで、自分の見たい情報のみの「泡」の中に閉じられてしまう。(坂倉副部長意見発表資料引用(イーライ・パリサー著「フィルターバブル-インターネットがかくしていること」))

3 議論の視点

(1) 青少年のコミュニケーションのあり方

ア 社会構造の変化と青少年育成・支援

- 現在も戦後の工業社会と同じように、大学の卒業一括採用から始まり、大学の偏差値の序列や、高校、中学校、小学校と下がるにつれて、よりよい大学に行かなくてはならないという思いが強いのではないか。例えば、50年前は言われた手順通りに物を作る人がたくさん必要だったかもしれないが、今はそうではない。今、5歳の子どもがどのような体験をすると、少なくとも20年後に、少しでもいい社会にできるのかという長い目で見た提案を議論したらいいのではないか。
- 約20年前から共働き世帯と専業主婦世帯が逆転し、女性が働いていることが当たり前になっている。働く親の世代が偏差値などを比較する社会の中で育ってきたため、感情の部分をあまり見ることがなく、常に自分の子どもと周りを比較して、子どもの知力だけに注目し、自分の思い通りにコントロールしようとする親が少なくない。そういった環境の中で、小さな頃からマイナスの感情を受けとめてもらえずに、子どもの感情が置き去りになり、20歳を過ぎても、それを言語化することが難しい状況にあると感じる。
- 近代工業社会の時代ではなくなったが、実はまだそちらを強化するような動きも一面であり、子どもが生きている世界と、制度がずれてしまっている。子どもたちは、そのはざままで苦しんでいるということがあるのではないか。そこに、バーチャルなものが入り込み、子どもたちがそちらに逃げていくということが起こるのではないか。もう少し身体の鍛え方や作り方のようなところや、親子の関係、社会と個人の関係のほか、個人の存在のあり方を個体として見るのか、もう少し関係の中において見るのかということについて、ここ20年、30年先を目安に議論してはどうか。
- 若者が言葉を出せなくなっているのは、社会参加のあり方や子ども・若者が参加する仕組みができていない社会だということではないか。そのため、若者は大人に従わなくてはならない、自分の意見がどうせ通らないという社会構造自体がつまらなくなっているのではないか。若者が提案したことが形となって受け止められ、承認されていく社会をどう作るのか。社会を構成するパートナーとして子ども・若者と大人が対等なパートナーだということや、子どもの力を信じてまちづくりをしていくことが必要ではないか。

イ これからの子どもの「育成」

- かつて、子どもは将来働き手になるということで、育成の対象、教育の対象となり、ある意味で将来の大人として価値化されてきた。一方で今は、子どもであることそのものが価値化され、何の基準で価値化されているかという基準がないのではないか。
- 成長や発達をしない社会に私たちは生きている。過去の成長や発達という意味で、例えば、労働者として働ける力を身につけていくことや、会社で働けるようになる力をつけていくというような基準がはっきりしていた。会社で働いている時間は、自分の働きで評価されるが、それ以外のプライベートな時間は評価の対象ではなかったはずだが、

今は、すべて日常生活から何から何まで全て評価の対象になってしまう。発達や成長をしていなくても評価されることになるのではないかな。

- 環境を与えられてその中で生きていこうとする、ある一定の方向に持って行かれるような、依存させられることを主体的と思わされるような形の存在ではなく、自分たちで価値を創り出し、環境を利用しながら、お互いに新しい関係性を作っていくという形に変えていかなければいけないのではないかな。

ウ 地域社会の中での青少年育成・支援

- 地域での子どもの育成では、ひきこもりなどの問題が生じる前に、予防型の支援を行っていくべきではないかな。地域社会が地域の子どもの育て、ともに学んで、ともに育つということが大切ではないかな。自治会やPTAは古いと言われているが、厚木市森の里地区では子どもの関係で、そういった組織が緩やかに繋がっている。
- 子どもが育つ環境づくりは、家庭だけではできない。また、学校だけ、地域社会だけでもできない。地域総ぐるみで、皆が共通認識を持って環境づくりをしていく必要があるのではないかな。青少年育成や子どもが育つ環境づくりは、まちづくりそのものであると考えて、自分たちの手で作っていき、それを少し行政が支えると成功するのではないかな。普段から地域の大人が、子どもを見守ることを心におくことが大切ではないかな。
- 今、子ども食堂が広がってきているように、一緒にご飯を食べるなど多世代でまじりあえるような、地域の第三の大人と交流できる社会が広がるとよいのではないかな。

エ 新たなコミュニケーションの可能性

- バーチャルでなければできないような、クリエイティブなものや皆が参加できないものをリアルとクロスオーバーすることで、リアルとバーチャルそれぞれの欠点を補うことができ、より面白いコミュニケーションができるのではないかな。
- 青少年のコミュニケーションの一つとして、コスプレのようにちょっと違うものになって、自分が表現できるような場や、素の自分のままを出さずに、別の自分を表現できるような取組みが地域の中にあってもいいのではないかな。

(2) 困難を有する青少年への支援

ア 安心できる人間関係の構築

- 困難を有する若者の中には、暮らしのモデルを持たない若者たちが多くいる。経済的に貧しいだけでなく、家族以外の人と出会う機会が少ないことによる関係性の貧困、コミュニケーション力の低さがある。受容され、安心して話せる人間関係を育むことが大切である。
- ひきこもり生活の中で手に入らなかった社会生活を取り戻す。受容され、安心して話せる人間関係を育むために、一緒にご飯を作って食べるなど、リアルな食を通じたコミュニケーションの場をつくる必要があるのではないかな。

イ 自己肯定感の育み

- 学習指導要領では、言語と体験ということが打ち出されている。言語を支える体験が弱くなっており、体験を語る言語が弱くなっているのではないか。その時に、承認ということが大事になってくる。結局、大丈夫だよと言ってもらえる関係を作っておくことが必要で、その中で例えば変わっていく自分をわくわくするとか、相手も変わってきてすごいと思えるという関係を作る。このことは、地域社会での活動にもかかわってくると思われる。
- 家庭でできなければ、地域や学校でなんとかするという形で、子どもたちを丸々人格としてどう捉え、肯定していくのか、そういう関係をどのようにつくっていくのかということを考えておかないと、子どもたち自身の肯定感を高め、自立させることは厳しくなるのではないか。

ウ 保護者へのアプローチ

- 日本の子どもたちの自己肯定感が低い背景には、保護者が「正しい親」になろうとしていることと関係が深いのではないか。正しい親だとみられたい保護者が、世間体に縛られ、情報過多の中で過剰な情報を手にいれ、早期教育に熱心になることで、子ども・若者のストレスが増えているのではないか。
- 青少年期になり、ひきこもりになってから保護者支援をするのでは、効果が厳しいのではないか。行政は、年齢の低い子どもから青少年まで全体を考えた保護者支援を庁内連携していく必要があるのではないか。

(3) 情報ネットワーク社会への対応

ア 情報ネットワーク社会における学び

- シンギュラリティ⁵や人生100歳時代は、何を学べば（教えれば）よいのかわからない時代の到来を予期する。何度もスキルや価値観を学び直す人生になることを前提に、学校教育・社会教育はデザインされるべきではないか。
- 多くの子ども・若者が、テクノロジーに「遊ばれる」、「コントロールされる」のではなく、テクノロジーを使って新しい「遊び」や「社会」を生み出していくという姿勢を身につけ、実践する機会を提供することが重要になる。
- 自分たちが社会を作っていくというマインドをどうやって持てるかということが大事で、そこが情報技術の教育に非常に重要ではないか。
- 情報技術を社会に導入することによって、単に便利、儲かるではなく、人間が幸せで元気になるかどうかという「Well-being」という基準を持って開発していくべきではないか。
- 情報技術によるコミュニケーションは、「仮想のコミュニティ」ではなく、リアルな

⁵ シンギュラリティ：人間の知性を人工知能（AI）が超え、加速度的に進化する転換点。米国の未来学者、レイ・カーツワイルはその時期の到来を2045年と予想する。人間が担ってきた高度で複雑な知的作業の大半をAIが代替するようになり、経済や社会に多大なインパクトをもたらすと考えられている。（2019.1.1 日本経済新聞引用）

人間関係を維持する基盤になっている。大人が率先して、情報技術を受容して利用していくことが大切ではないか。その際に、単に便利だから、お金が儲かるからということではなく、「Well-being」な指標や概念が新しいポイントになるのではないか。

イ 価値創出におけるプロセス

- バーチャル空間において非日常性な価値を創造する「場」をつくる。今、バーチャル空間で飛び交っている情報は日常的なものが多いが、芸術や学術といった非日常的な価値をつくる場ができないだろうか。感覚によって情報発信しているところから抜け出せるのではないか。
- これからは、以前のように育成し、同じような能力を備えた人を育て、労働力にしていくという教育ではなくなるだろう。関係の中から、思わぬことが起こるという力を発揮するといった形になっていくのではないか。同じ方向に向かって成長、発達するというのではなく、日々多元的に多方向に変わっていくことを認めて、背中を押してやるという関係に入るのではないか。それをこれからは、教育とよぶことになるかもしれない。

4 議論の方向性～情報ネットワーク社会におけるコミュニケーションと育ちを考える

(1) 情報ネットワーク社会における若者の信頼関係と成長

～信頼のあり方は多様化しているのか。成長につながる信頼関係とは何か。

- 小学校の高学年や、中学生、高校生にとって、LINEなどのSNSによる友達とのやり取りは、会話と同じという認識がある。友達と繋がっていたいと、LINEで一晩中繋がりが、誰かが発信したことに「うん、うん」など相槌を打つだけのやり取りが続くこともある。また、SNSによる会話では、信頼が失われないように丁寧なやり取りを心がけていると感じる。若者の中ではSNS上の信頼関係を育むことがとても大事になっていると思われる。これは、大人が近所や地域の人と丁寧にお付き合いをするということと同じような感覚なのではないか。
- メディアを通じた情報発信、受信は、部分的で不完全なものである。例えば、テレビのメディアには、情報発信する側の主観的な意図や、情報を部分的に切り取り、ある一定の情感を押し付けているのではないかという批判が伝統的にある。SNSによる情報発信、受信についても同様に部分的な情報のやり取りであり、信頼関係を生み出すほどのコミュニケーションにつながるのかが問題なのではないか。部分的な情報のやり取りから生まれてくる新しい形の信頼関係は、人間を成長させるのだろうか。
- 「VUCA」の時代という言葉に象徴されるように、不確実で複雑な時代となっている現在、信頼のあり方も非常に多様になってきているのではないか。信頼の質や形が、流動化する社会の中で変わってきているとみることもできるのではないか。そうした信頼が、成長に繋がるのか、あるいは成長に繋がる信頼にはどのような要素や、条件、環境が必要なのだろうか。
- 情報ネットワーク社会における信頼は、SNSで発信する相手が特定であるのか、不特定多数であるのかにより条件が違ってくるのではないか。相手が不特定多数の場合、信頼性など何もないのではないか。その点が問題になっているのではないか。相手の顔が見える場合と、見えない場合では、話し方なども違うのではないか。
- 大学生の間では、SNSの使い方として、LINEはおしゃべりで、FacebookやInstagramは、友達と過ごしている様子などを動画で発信していることが多い。また、文章を書くことができる人は、今の自分の思いを表現しておき、後で振り返る材料にしているケースがある。さらに、大学生には、セルフブランディングのような意識があるように思われる。意図的に発信する情報を選択して、こういう私というものを作っているのではないか。不特定多数への情報発信においても、自分のことをどのように見てもらいたいかということ意識しているのではないか。
- 今の若者は、安心して自分を表現し、ありのままの自分を受容されてきた経験が薄い世代なのではないか。その癒しなのか、SNSで自分のことをわかってほしいと、動画などで表現し、自分の心象風景を言葉にしないのではないか。自分が傷つきたくないという、言葉にすると否定される気がして、LINEのスタンプで今の気持ちはこのような感じと誤魔化しているという印象も受ける。こうした中で、人間を成長させるようなSNSのやり取りは難しいと感じる。傷ついてきた自分は、これ以上傷つきたくないから、同質の仲

間からエールが欲しいが、自分が発信したことを通じて、相互に談義し、自分を深めていこうという方向のメディアにはならないのではないかと。

(2) 曖昧なコミュニケーションと人間関係

～曖昧なコミュニケーションにより、人間関係も曖昧になっているのではないかと。

- メッセージのやり取りの基本的なコアの部分は言語であり、言語により社会も運営されてきた。自分の考えを言語化すると、それに対する批判というものは生じるものである。それが議論ということであり、デモクラシーの基礎となっている。しかし、批判だけであると、非難や誹謗中傷になる可能性もあるため、防御的になる。今の若者は、言語だけではなく、漫画やイラストなど多様なメディアがある環境の中で育ってきている。言葉で表現することで非難されるのであれば、スタンプや写真などを使う方がいいと、言語に対して消極的になるのではないかと。
- 曖昧なまま進むコミュニケーションでは、気持ちを読み取ることは難しく、齟齬が生じるのではないかとと思われるが、ある程度の範囲の中で少々ずれたとしてもコミュニケーションは進んでいく。これまでは、相手が出した情報の意味を的確に受信するようにされてきたが、今のコミュニケーションは厳密ではなく、ある幅の中で進む「曖昧なコミュニケーション」というものがあるのではないかと。
- 若者は、自分は傷つきたくないし、相手のことも傷つけないだろうという想像のもと「曖昧なコミュニケーション」をしているのではないかと。とても繋がってみたいけれども、深めたくはないということではないかと。これまでは、お互いに分かり合うということが信頼だと考えられてきたが、今の若者の思っている信頼の質や幅は違うのではないかと。
- 若者の対面でのコミュニケーションでも、波風をたてずに曖昧なまま、お互いに気持ちを共有しているという繋がり感のまま進み、うまくいかなくなるということがあると感じる。物事をはっきりさせ、白黒つけることや、自分の考えが異なることを表明する勇気がなく、その場にいる誰かが何とかするだろうと、曖昧なまま終わることがある。それは、成熟していないからなのだろうか。
- ひきこもりや生きづらさのあるような困難を有する若者には、白黒はっきりさせることやゼロか100しか考えられないという特徴を持つ人が多いと感じる。そうした人は、「曖昧なコミュニケーション」が進む場に居づらくなることがあるのではないかと。なんとなくスタンプを送信できれば楽だが、それができずにこだわる若者は、生きづらさを感じるようになるのではないかと。
- 困難を有する若者の場合、居づらい場から抜けて別の仲間と関係を深めることは難しい。また、LINEのグループの中に一人異質な人がいると、その人を除いたグループを作り、いじめに繋がることになる。大人数のグループの中でも、熱意のある人同士でグループができ、その中でも仲の良い人同士のグループができるというように、小さいグループができていくように感じる。グループの友人は、同じような価値観を持っているため、正確ではなくても、曖昧なままで何となくわかる。居づらい人ははじかれていくように思う。若者には、グループからはじかれないように、とりあえず答えて、皆が向いている方

向にいかうとすることもあってはならないか。

- 友人関係や仲間関係が、曖昧なコミュニケーションにより快く進んでいくために小さなグループになっていくということは、同質性が高く、とても小さなコミュニティがたくさんある状態になる。これでは、社会性が身につくかわからない状況になっていくのではないか。また、世の中には、異質な価値観があるという認識が乏しくなってしまうことになるのではないか。
- 集団が大きなものから小さくなり、分散化していくことは、多様化とは異なる考え方で、自分の仲間だけを集めているということになるのではないか。
- 若者は、LINEのグループごとに場を規定する感覚があり、場の機能や性質をとて意識していると感じる。自ら規定した場で、自分の表現を使い分けている。
- 若年無業者を支援する中では、就職して多世代の人と仕事をしたが、価値観の違いから企業で働くことが難しくなり、自分で起業したいと相談にくることがある。自分が育んできた、演じて使い分けてきたコミュニティはあるが、社会に出て異質な価値観の中ではなかなか生きていけない。一方で、生きていける若者もいるが、その違いは何だろうか。
- リアルな対面を前提として、お互いの思いを吐露しあった経験のあるグループだとSNSでの自己開示もとても進むが、SNSの関係だけだとそうはならない。対面とSNSの活用というセットでコミュニケーションが深まっていくのではないか。
- 自分の意見を他人が受け入れるか、受け入れないかということに気にせず、他人に関心がない若者がいるのではないか。そうした若者は、自分の意見と違うため、相手が反論するだろうということまでは、気にしていないのではないか。自分の意見に反論され、それに対して反論するということは面倒だと感じる。
- コミュニケーションの曖昧さは、感覚を共有するよりも言語によってしっかりと方向性を決めたり、意味をしっかりと確定させていくことでずれが生じるのではないか。また、LINEで自分の意見を長文で送ってくる人に対してスタンプ一つで返信するなどコミュニケーションの「熱量の差」があるとなかなか話が進まず、お互いにイライラすることがある。
- ある若者が突然予定をキャンセルするときに「ごめんなさい」とだけSNSで送信してきたことがある。謝るときには、ただ「ごめんなさい」と伝えるだけではなく、そこに至った背景も含めて説明しなくては受け入れてもらえないと考えられないのかもしれない。自分がしたことが誰に、どのような影響を与えるのかという想像が働かず、そうしたところも曖昧になっているのではないか。
- 自分がしたことで、誰かに迷惑をかけることになると思えば、謝罪の言葉とともに、理由を説明するのではないか。そうしないのは、人間関係がみえておらず、体験の不足により想像力が働かないからではないか。
- 一方、若者支援している中で、若者から「これをする意味は何ですか」、「社会に出るとい意味が分からないので教えてください」といった背景を聞かれることがよくある。
- 若者にとって、感情という曖昧なもので繋がっていくコミュニケーションの空間が日常的にあるとすれば、言葉できちんと説明することは、怖いことなのではないか。言葉で説明すると分かり合えないのではないかといった恐れをどのように緩和し、フォローできる

のだろうか。

- 青少年の健全育成支援については、今の若者像を念頭に議論していく必要がある。今の若者の多数派は、「曖昧なコミュニケーション」により人間関係を築き、その人間関係も曖昧で、信頼の質や形も変化しているように思われる。体験活動は当然必要であり、重要であるが、その絶対量は不足している。今の若者像を前提とした、別の方法で健全育成を支えられないかということを考えなくてはならない時期に来ているのではないか。

(3) 親子のコミュニケーション

～親子のコミュニケーションも曖昧ではないか。親子で地域にでる機会が必要ではないか。

- 子どもが育つプロセスの中で、親が先回りをして子どもの気持ちをくみ取り、親が判断してしまうことが多くなっているのではないか。子どもの成長のために、子どもの気持ちを深く問う、丁寧に語り合うという親子関係ではなくなっているのではないか。簡単に理解しようとする親子関係となり、子どもも、親も社会での人間関係にそのまま通用するかのように思っているのではないか。
- 家庭が小さな社会であると捉えると、親が子どもの気持ちを確認せずに深めていないことが多い。家庭内にも「曖昧なコミュニケーション」があり、そのことが他とのコミュニケーションに影響しているのではないか。
- 今、子育て支援の現場では、就学前の子どもたちが、自分の心の中に社会的な存在として他者を受け入れ難くなっているのではないかという指摘がある。保護者も子どもを他者として見ておらず、親子で依存していることが多いのではないか。それが青少年になってからのコミュニケーションのありように影響しているように思われる。
- 同じ家の中にいるのに、親子がSNSで連絡を取っていることがある。夜中に帰ってきた子どもがLINEで「ごめん、おやすみ、寝る」という発信で終わり、親も子どもに何か事情があったのだろうかという問い詰めることもしない。親子でさえ、コミュニケーションを対面でとることが薄れ、気持ちを言葉にして説明しようということがなくなっているのではないか。自分のことをわかってほしいという子どもは増え、自分の気持ちを受け止めてくれないと怒りになってしまう。ベースとなる家庭での親子関係が崩れていることで、感情を言葉にして伝えられなくなっているのではないか。
- 親が「どうしてそうなの」と尋ねて、子どもが想定外の返答をした場合、親がすぐに怒ってしまい、子どもが何も言わなくなるということがある。親が1分でも2分でも子どもの言い分を聞き、「間(ま)」をあけて受容するということが、育まれず、養われていないのではないか。
- 今の子どもたちは、複雑で曖昧な社会に出て行くという状況であり、親世代が育ってきた社会とは異なっている。0歳から6歳くらいの子を持つ親が、子どもへの対応の仕方を学べる機会をつくってはどうか。
- ある団体では、子どもが何か攻撃されたときに「やめて」と言うなど、シチュエーション別に子どもが、自分の気持ちをどう伝えるかというソーシャルスキルを高めるトレーニングをしている。幼児から小学校2、3年生くらいまでの子どもを対象としており、親子

で参加することもできて、親から支持されている。

- これまでは、家庭教育の中で社会力のようなものが育まれてきたが、今は親も何が正しい答えなのかわからず、ソーシャルスキルトレーニングなどに頼るといことがあるのではないか。
- ある親子参加型のキャンプ募集では申し込みがなく、子どもだけの参加に変えた途端に、多くの申し込みがあった。親は子育てについて、誰かに何とかしてほしいと考えている。子どもがキャンプなどに参加している間に、親は自分がほっとしたいという気持ちもあるのではないか。
- 子育てに意識が高い親は、過干渉、過保護になりがち傾向があり、意識が低い親だと子どもに無関心でネグレクトのような状況になるという二極化している状況があるのではないか。
- 子育てをしている親が、他の親子がどう接しているかを見る機会が減っているが、他の親子の関わりを見ることは、とてもいい学びになる。一方で、SNSなどでキラキラ光る親子関係を目にする機会は多く、親たちは苦しい思いをしているのではないか。
- 親の考え方が、子どもの考え方だと思っている親こそ、いろいろな社会体験を通じて親として育つことはとても大切である。地域では、子どもを対象としたイベントを実施する際に、学校に協力してもらい、全児童が対象となるようにした上で、多くの保護者が参加に前向きになるような仕掛けをつくることも必要ではないか。
- 子どもや若者が、人間関係の中で他者を意識していないと、コミュニケーションや、信頼関係が不十分なものになるのではないか。そうすると、若者の社会参加や職業参加、地域の活動が乏しくなっていくのではないか。

5 今後の検討について

県は、青少年の健全育成と自立への支援を、県民全体の理解と協力と責任の下で進めていくための共通の道しるべとして、「かながわ青少年育成・支援指針」を策定し、課題に応じた様々な青少年施策を進めている。本指針は、計画期間を2016～2020年度としており、2020年度に改定作業を予定している。改定にあたり、今期協議会の最終報告を踏まえ、施策の基本目標や施策の方向を検討することとしている。

2019年度の協議会では、「中間とりまとめ」でまとめた方向性に基づき、これまでの議論について、実践的な事業を行って検証するなど、県が取り組むべき青少年施策について議論を深め、最終報告をまとめる。